第15分科会

就業中の高次脳機能障害者に対する効果的な支援に関する一考察

～医療機関や障害者職業総合センター職業センターとの連携事例～

○ 西山　充洋　（千葉障害者職業センター　障害者職業カウンセラー）
狩野　眞　（障害者職業総合センター　障害者職業カウンセラー）

1. はじめに

●千葉障害者職業センターで実施している支援について

就職に向けて　働き続けるために　職場復帰に向けて

障害者

職業評価（アセスメント・情報の整理） ➡ **支援プラン（職業リハビリテーション計画）の策定**

職業準備支援
- 模擬的作業、職業準備講習（講座）
  自分自身の特性（作業への影響、疲れやすさ等）を確認
  自分にあった補完手段や対処方法を検討、試して確認

就職後の職場適応指導

相談

事業主

ジョブコーチによる支援（職場訪問型の支援）
（雇用前～支援・雇用と同時支援・雇用後支援・復職支援）

精神障害者職場復帰支援
- 職場復帰のコーディネート
- リワーク支援

事業主支援
・継続雇用に向けて、職場復帰に向けての事業主支援
～課題解決・職場復帰に向けた進め方相談、職務再設計、受け入れ態勢づくり（人的・物理的環境）助言等～
- 障害者雇用に関する相談、援助（雇い入れ支援、定着支援）～採用、配置、職場定着、職場復帰に向けた支援～
- 雇用管理サポート（事業主支援ワークショップ、障害者雇用支援人材ネットワーク事業）

関係機関

関係機関に対する助言・援助
- 職リハに関する技術的支援（助言、対象者を介した協同支援、ケース会議開催、実習等）
- 職リハの人材育成（障害者の就労支援に係る基礎的研修、ジョブコーチ養成研修等）

NIVR

■本発表では**就業中の高次脳機能障害者に対して支援者が職場に介入し、環境調整を試みた支援**について報告　　↓

職場の理解を得るために…

- 職場内支援　千葉障害者職業センターのJC支援
- 職場外支援　障害者職業総合センター職業センターの高次脳機能障害者の支援プログラム
- 医療機関を含む専門機関と連携

「本人が職場でとりうる対処」や
「職場への特性の伝達等に係る支援を行った内容」を振り返り効果的な支援のあり方について考察する

2. 支援事例の概要

Aさん　50代女性　物流会社勤務（勤続年数20年以上）
【主な症状】記憶や注意力の低下、疲労感

- 自宅で過ごしていたところ、脳出血で倒れ、休職
- 約1年半、入院によるリハビリテーションを行い、約2年の休職期間を経て休職前の部署へ短時間勤務（4時間）で職場復帰
- 仕事は、貨物情報等のデータベースへの入力、集荷や運搬を担当する者への連絡等
- 復職時から関わっていた上司が異動
- 職場内で円滑なコミュニケーションや職務が行えず悩み、本人が利用していた医療機関へ相談
- 医療機関のコーディネーターから、本人が利用していた千葉障害者職業センターを紹介

Aさん
・今は短時間勤務だが、将来的に時間を少しでも伸ばしていきたい。
・疲れやすい、メモしていても記憶できないことや分からないことが多い

医療機関
・医療機関が作成した意見書が部署内まで伝わりきらず、具体的な環境調整に至りずらかった

会　社
・受傷前から遂行していた業務を任せている
・意見書に基づき対応はしているが…

3. 高次脳機能障害者の支援プログラムと連携した支援

千葉障害者職業センター

職場内支援

ジョブコーチ支援を実施

支援目標

【Aさん】

疲労や記憶障害への対処策検討

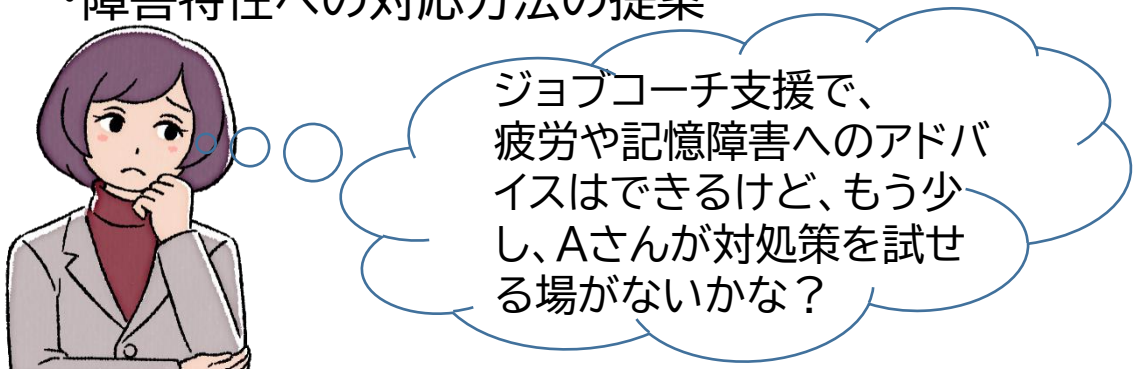
記憶に頼らず行動にうつすためのポイント整理

時間延長の可能性を探る

【会　社】

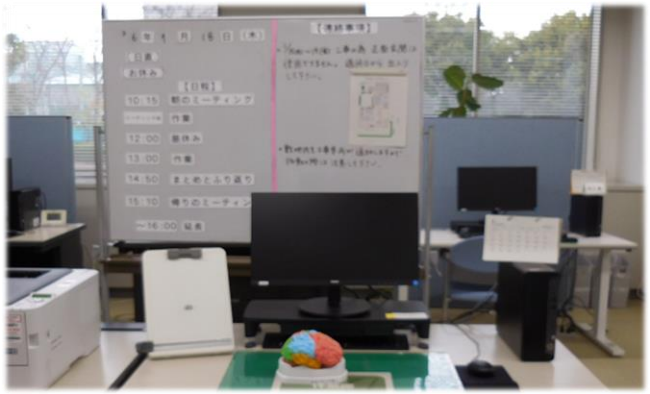
・業務面で配慮を要する点の整理

・障害特性への対応方法の提案



高次脳機能障害者の支援プログラム

職場外支援



・在職者も参加できる

・働きながら対処策を検討できる

・勤務時間よりも長く作業することを試し、翌日の疲労も確認できる

高次脳機能障害者の支援プログラムとジョブコーチ支援の相乗効果

Aさん

会社

取組み状況の共有

情報共有

高次脳機能障害者の支援プログラム

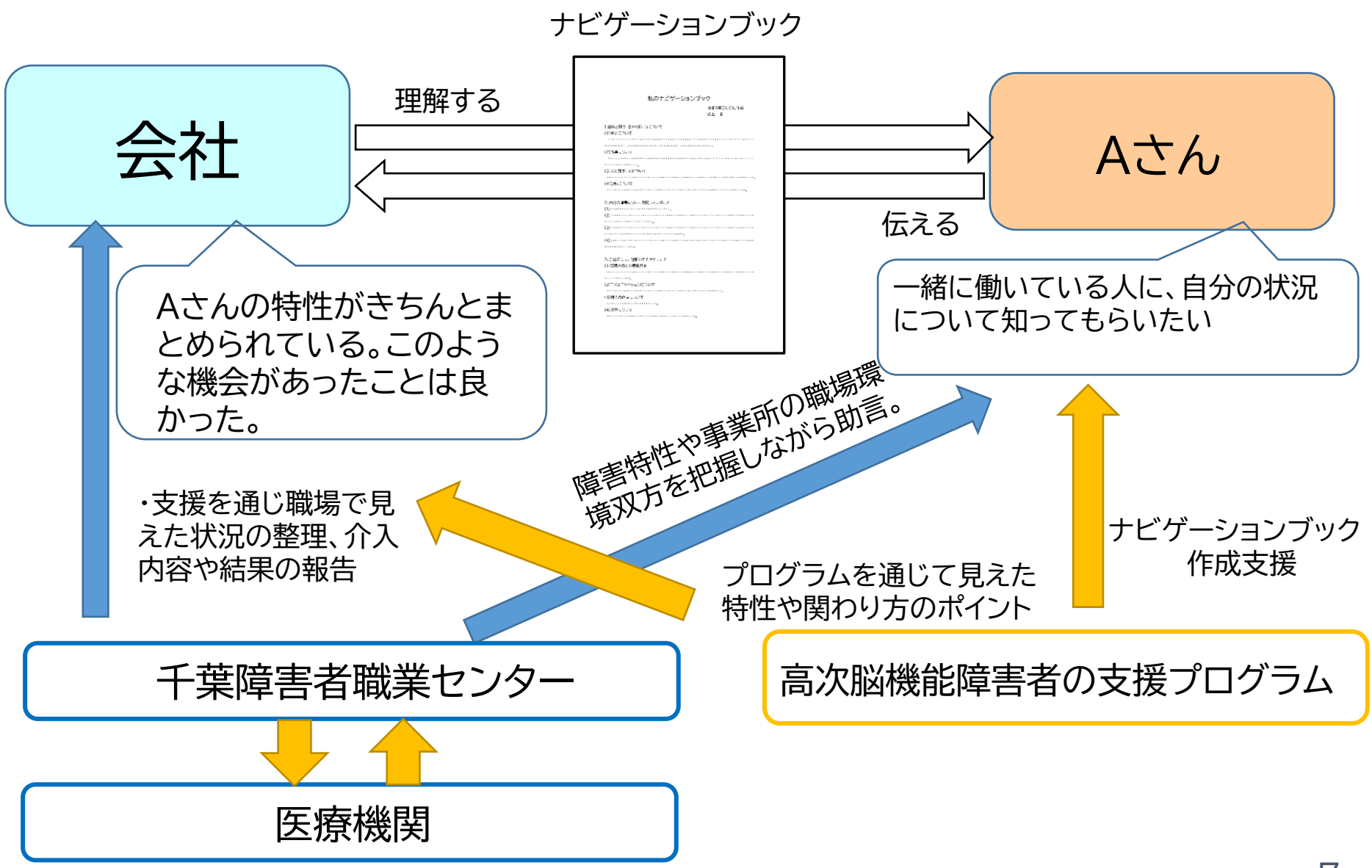
- 月1回午前・午後に参加
- 視聴覚教材で知識を習得
- 作業場面で対処策を実践
- 当事者同士の意見交換に参加

ジョブコーチ支援（千葉障害者職業センター）

- プログラムの内容の理解度を確認
- プログラムで学んだ対処策を職場で実践して検証
- プログラム受講翌日以降の疲労の現れ方を日誌で確認

ハイブリットな支援

高次脳機能障害者の支援プログラム支援プログラム終了時



4. 考察　～支援のポイント①～

◎職場内支援＋職場外支援の有効性（効果的だったこと）

●職場内支援（職場に訪問して支援を行うJC支援を活用）
→実際の職場や職務の遂行状況、疲労具合等、客観的な情報から状況把握、課題について分析し、対処・対応を検討

●職場外支援（高次脳機能障害者支援プログラムを活用）
→職場では試しづらい負荷（時間）、様々な職務を設定し試行
作業への影響や疲労具合を確認し試すことできた

Aさんにとって…自信になる（課題への対処を試すことができる、試したことを職場で実践できる）
Aさん・事業所双方にとって…安心感の向上、現実的な材料提供の機会として有効

4. 考察　～支援のポイント②～

◎個別支援だけでなくグループワーク（講座等）を実施することによる「グループの力」の活用

●近い境遇、同じ高次脳機能障害者の困り感や工夫している対処、得ているサポート等を聞くこと

Aさんにとって…自身の特性や取り組んでみたい対処等気づきを得ることのできる機会となった

※自身の状況を認知する、特性に気づくことは難しい
「自分で気づく」ことができる機会づくりの工夫が必要

4. 考察　～支援のポイント③～

◎ナビゲーションブックの作成と活用

●”Aさんの思い”をもとに作る
　Aさんは、「事業所にも高次脳機能障害について伝えたい」
　×　支援者の思いではない
　→例：記憶障害があり、複数の指示を同時に記憶することが苦手なので、指示する際は一つずつ伝えてください　等

●取組過程も大事…支援を通じてAさん、支援者がお互いに気づいたことを共に貯めて共有できる

Aさんの言葉で、自身の特性について会社にあらためて伝えることができるコミュニケーションツールとして、**「ナビゲーションブック」の活用は有効**

NIVR

4. 考察　～支援のポイント④～

◎地域の関係機関との連携による支援

高次脳機能障害者の復職or就職後何年か経っている在職中ケースの場合は医療情報等を得ることが難しい場合もある

↓

●医療機関と連携
…多角度からの情報を集め、高次脳機能障害を理解することに役立つ
…支援の方向性や妥当性の共有ができる

●地域の関係機関や家族と連携
…職場に向けたアプローチだけでは解決できない課題もある

情報を繋ぐ、地域資源をつなぐ
＝
ネットワークの構築
↓
支援に活かす

職業リハビリテーションサービスの強み

千葉障害者職業センターにできる役割の一つ